ロシア論におけるマルクスとエンゲルス

——平田・竹内論争を中心として——

淡　路　憲　治

まえがき

1967年の田中真晴氏の『ロシア経済思想史の研究』，1968年の広松渉氏の『エンゲルス研究』，1969年の平田清明氏の『市民社会と社会主義』，1970年の山之内靖氏の『マルクス・エンゲルスの世界史像』等の著作をえて，わが国のマルクス研究ならびにマルクス主義研究は，この4,5年来，新しい研究段階にさしかかったともいうべき，大きな波の昂まりを見せている。これらの研究にみられる共通の問題意識・分析視角の特徴は，従来の研究にともすれば見られがちであった特定の権威や尺度に安易によりかかるのではなく，マルクス・エンゲルス，またはレーニンに内在化して，彼らの思想や理論を，その生涯をとおしての活動・研究の発展過程との関連において把えようとするところにある。つまり，権威主義・教条主義的解釈を拒否した次元において，マルクス，エンゲルスまたはレーニンの原像を復元しようとするのであり，かつそうして復元された彼らの学説がはたして現在においてもなお現実の分析と変革にとって有効性をもちうるかどうかを験そうとするところに，これらの研究に共通する姿勢がみられるのである。

筆者自身も1971年2月出版の『マルクスの後進国革命像』において，そうした姿勢をもって，マルクスの思想展開過程の一端を追求したのであったが，拙著の「第三部」では，晩年のマルクスとエンゲルスのロシア像を検討した。拙著出版後の一年あまりの間に，マルクス，エンゲルス，レーニンのロシア論の再検討の気運はますます昂まると共に，それとの関連においてウェーバーのロシア革命論やロシアのミールについての意欲的な研究があいついでなされてきた。それらのうちの二三のものをあげれば，平田清明「歴史的必然と歴史的選択」，林道義『スターリニズムの歴史的根源』，保田孝一『ロシア革命とミール共同体』などがある。このうち，平田氏のものは，1881年のマルクスのザスーリッチあての手紙およびその草稿のわが国における最初の翻訳者である氏自身が，晩年のマルクスのロシア論を『展望』誌上に3号にわたって展開した長大論文である。この論文は，ここ4,5年来，矢つぎ早に雄渾な論文を発表して，マルクス研究に「新しい地平」を切り拓いている氏のものとしては，『市民社会と社会主義』，『経済学と歴史認識』につぐものであり，この論文をこれら二著書と併読することによって，われわれは氏のマルクス研究の輪郭をほぼうかがい知ることができるようになった。

この平田論文「歴史的必然と歴史的選択」の「最終回」には，「〈ザスーリチあて書簡〉についての竹内芳郎氏の見解について」という「付論」が付せられていて，竹内批判がなされている。平田氏のこの「付論」は，そもそも竹内氏が『思想』誌上に連載した「われわれにとって『資本論』とは何か」(上，中，下)という平田氏の『市民社会と社会主義』を検討した論文の「下」において，マルクス，(エンゲルス)，レーニンのロシア論についての平田説を検討し，あわせて竹内氏自身の積極的見解を提示していたことに対する，平田氏からの反論なのである。平田氏のこの竹内批判に対して，竹内氏は同じく『展望』誌上で，「平田清明氏に答う」という副題を付した，「政治的選択と〈客観的可能性〉」という論文を発表している。こうして，マルクス，(エンゲルス)，レーニンのロシア論をめぐって，平田・竹内両氏の間で論争がなされているのであるが，この論争において筆者の見解もまた引き合いに出されてい

るので，本稿では拙著出版後，一年あまりをへた今の時点で筆者自身のマルクス・エンゲルスのロシア論を再検討すると共に，平田・竹内論争についての二三の論点を検討してみたいと思う。なお，筆者が本稿を執筆するにいたったのは，このように平田・竹内論争に触発されたことの他には，拙著執筆の時点ではなお未見であった K. マンデルバオムの論文を読んだこともその理由の一つである。マンデルバオムの論文は，1929 年にグスターフ・マイヤー編の『マルクスとエンゲルスのダニエリソンあての書簡集』が出版された際，それに付せられた「序説」Einleitung であり，今後，マルクス，エンゲルスのロシア論を検討する場合にはぜひとも参照さるべき重要な文献の一つであると考えられるものである。

以下，本稿では，まず晩年のマルクスとエンゲルスのロシア像・ロシア論にみられる差異について検討し，ついで海外でのマルクス，エンゲルスのロシア論研究の代表的なものと考えられる，マンデルバオム，シュヴァルツ，ワリツキーの三者の見解を対比し，最後に平田・竹内論争についての二三の論点を検討したい。

1. ロシア像におけるマルクスとエンゲルス

晩年のマルクス，エンゲルスのロシア論の流れと両者のロシア像にみられる微妙な差異，ならびに 1883 年のマルクスの死後における，エンゲルスのロシア論の屈折した推移については，すでに拙著の「第三部」の「第八章　ロシア論におけるマルクスとエンゲルス」，「第九章　マルクス死後のエンゲルスのロシア像」において詳細に論じたので，それらについては，ここでは，本稿展開のための必要な範囲内で要約するにとどめたい。マルクスとエンゲルスの両者のロシア像・ロシア論は，基本的には共通な考え方の上に立つものでありながらも，両者の間には微妙な差異があったと考えられる。しかも，その差異は，田中真晴氏[1]の主張されるごとく，エンゲルスが，マルクスの生前にマルクスと共有していたロシア観——それを端的に示しているのは 1882 年の『共産党宣言』ロシア語第二版への両者の共同署名をもつ「序文」であるが——から離れていったのは，単にマルクス死後においてのことではなく，実はマルクスの生前においても，両者のロシア像には微妙な差異があったのであり，それが 1882 年の「序文」では一定の妥協の結果として，両者の共通共有の「もし，ロシア革命が西欧のプロレタリア革命にたいする合図となって，両者がたがいに補いあうなら，現在のロシアの土地共有制は共産主義的発展の出発点となることができる」という見通しが打出されているのだ，というのが筆者の見解である。「序文」における両者の妥協説を主張しているのは，S. M. シュヴァルツや水田洋氏であり，その他にも A. ワリツキーやマンデルバオムもそれに近い見解を示している。

ところが，1883 年のマルクスの死後において，次第にエンゲルスはこの「序文」に示されている見解から離れていったのであり，彼のロシア論の結論であり，総決算とみられるのは，彼の死の 1 年前の 1894 年に，約 20 年前の 1875 年における彼自身の論文「ロシアの社会関係」に付せられた「あとがき」であり，この 1894 年の見解は，1882 年の「序文」とは異なって，75 年のそれに復帰したことを示すものである。このような筆者の見解とは反対に，マルクス，エンゲルスの両者のロシア論における一体説，しかもエンゲルスのロシア観は 1875 年の「ロシアの社会関係」から，1882 年の「序文」を経て，1894 年の「あとがき」に至るまで終始一貫しており，その間に変化はみられなかったとしているのは，浅田喬二，福冨正実氏らである[2]。

1)　田中氏の見解については，『ロシア経済思想史の研究』の「第一章，二　マルクス・エンゲルスのロシア論」参照のこと。

2)　浅田氏の見解については，すでに拙著で検討したので，ここでは福冨氏の見解にふれておこう。福冨氏は，エンゲルスの 1875 年の「ロシアの社会関係」，マルクスの 1881 年のザスーリッチあての手紙と草稿，1882 年の両者の共通署名をもつ「序文」，1894 年のエンゲルスの「『ロシアの社会関係』へのあとがき」の全体をつうじて，マルクスとエンゲルスのロシア観の一体説を主張されている。その際，氏は，「1881 年のマルクスは，1875 年のエンゲルスと同様に，ロシアの共同体の非資本主義的発展の第一条件としては，ロシ

筆者が，マルクスとエンゲルスの両者のロシア像には，すでに1882年の「序文」以前の時点において微妙な差異がみられたと考えるのは，水田氏も主張されるごとく，1875年のエンゲルスの「ロシアの社会関係」と1881年のマルクスのザスーリッチあての手紙およびその草稿にみられる見解とには微妙かつ重大な差異がみられるからである[3)]。この点について，水田氏は，「ロシアにおける共同体から共産主義社会への短絡が，マルクスは内発的に，エンゲルスは外発的に可能であると考えていた」(水田編『マルクス主義思想史』，35頁)，と主張されている。

エンゲルスのロシア観は1875年の「ロシアの社会関係」において定式化されているが，そこで彼は，「ロシアの農民がブルジョア的分割土地所有という中間段階を経由しないですむようなやり方で，この社会形態を高次の形態へ移行させる可能性」は，「共同体所有がまだすっかり解体してしまわないうちに，西欧のプロレタリア革命が勝利のうちに遂行される」場合にのみ，それは現実性に転化しうるのであると主張している。このエンゲルスの主張は，逆にいえば，もしも「外からの衝撃」としての西欧のプロレタリア革命の勝利がみられないならば，ロシアの共同体は必然的に崩壊するだろうという彼のロシア社会発展像と一対になっている考え方である。それに対して，マルクスのロシア論は，ほぼ1877年の『祖国雑記』編集部への手紙，1879年のダニエリソンあての

アの共同体が資本主義的生産様式の肯定的な諸成果をわがものとすることを可能ならしめるような西ヨーロッパ諸国における社会主義革命の実現を念頭においている。それと同時に，彼は，ロシアの非資本主義的発展の第二の条件として『一つのロシア革命』を指摘したのである」(福冨『共同体論争と所有の原理』，81頁(傍点，福冨氏))，という。この二条件において，マルクスとエンゲルスは同一見解であったとされるのであり，この見地にたって氏は水田氏のマルクス＝「内発」説，エンゲルス＝「外発」説を批判している(同書，同頁)。福冨氏のこの見解に対しては，本文でも述べるごとく，エンゲルスは，ロシアの非資本主義的発展の不可欠の前提条件を，もっぱら西欧のプロレタリア革命の勝利に求め，したがって，もしもこの「外からの衝撃」がないとすれば，ロシアの共同体の崩壊は歴史的必然であると考えていたのに対して，マルクスの場合は，「外からの衝撃」とは一応別個にロシアの現状からして「内発的」に共同体はロシアの「社会的再生」の拠点であるという，非資本主義的発展の道を想定していたのであり，両者のロシア像には微妙な差異があったのだ，といいたい。

3)　1875年のエンゲルスと1881年のマルクスのロシア観には微妙な差異がみられるのであるが，果して，すでに1875年の時点においても，両者のロシア観には差異があったのかという点になると問題がある。エンゲルスの「ロシアの社会関係」は，1874年6月から75年4月まで，『デル・フォルクスシュタート』誌に連載された「亡命文献」(「1」～「5」)のうちの最後の「5」として発表されたものであるが，この「亡命者文献」の「3」において，エンゲルスはトカチョフのブランキ主義的な陰謀的革命観を「未熟な青くさい中学生」じみたものであると批判したことをきっかけとして両者の論争が始まり，「4」にひきつづいて，「5」の「ロシアの社会関係」を発表したのであり，この「5」において，彼のロシア社会発展像が定式化されているのである。ところで，「3」におけるエンゲルスのトカチョフ批判に対して，トカチョフの方は，チュリッヒの『タークヴァハト』社から1874年に『フリードリッヒ・エンゲルス氏あての公開書簡』という反駁書を出版しているが，マルクスとエンゲルスの蔵書中の1冊であるこの書物の扉の右下に，マルクスはエンゲルスあての書き込みをしている。(Ex Libris Karl Marx und Friedrich Engels. Dietz Verlag, Berlin. 1967, ss. 194—96)。この書き込みにおいてマルクスは，「何んと頓馬な切りつけ方をしていることか……。何よりもまず，トカチョフは，君〔エンゲルス〕がトカチョフを君の論敵としてとり扱っていることを，読者に〔示そう—淡路〕と欲しており，それ故に実際にはありもしなかった凡ゆる論争点を捏造しているのだ。」と，トカチョフを罵倒している。この書き込みからすれば，マルクスは少くともこの1874—75年の時点ではトカチョフを批判するエンゲルスに完全に同調していることが知れる。ただし，ここで留意されねばならぬのは，次の点である。問題の「亡命者文献」の「3」においてエンゲルスは，ロシア社会の分析およびその発展傾向については，ほとんど述べていないのであり，彼のトカチョフ批判は専ら，「人民はいつでも革命の用意ができている」，それ故に「われわれは待つことはできないし，待とうとは思わない」と叫ぶトカチョフを，「未熟な青くさい中学生」としてなされているものである。したがって，マルクスが，この書き込みにおいて，トカチョフを罵倒していることからして，彼のロシア像またはロシア観もまた，1875年の「ロシアの社会関係」にみられるエンゲルスのそれと同一のものであったかどうかについては，何とも言えないところである。なおこのマルクス・レーニン主義研究所刊の『マルクスとエンゲルスの蔵書』の内容については，関西大学『経済論集』第18巻第1号にのせられている杉原四郎氏による周到な紹介・解説を参照のこと。

手紙，1881年のザスーリッチあての手紙およびその草稿という流れにおいて展開されており，1881年の手紙，とくにその草稿において，彼のロシア論の到達点が示されている。1881年の手紙および草稿では，まず，「西欧の運動は，私的所有の一つの形態から私的所有の他の一つの形態への転化が問題になっているのに対して，ロシア農民にあっては，彼らの共同所有を私的所有に転化させることが問題である」(強調点，原典)と述べて，西欧とロシアにおける重大な差異を指摘した上で，西欧のプロレタリア革命との関係とは一応別個にロシア社会の分析の結果として，「共同体はロシアの『社会的再生』の拠点である」こと，ただし現に共同体は危殆にひんしているから，それを救うには「一つのロシア革命が必要である」という結論が打出されているのである。

このように，1875年のエンゲルスは，「外からの衝撃」のない限りは，ロシアの共同体の崩壊は歴史発展の必然の道であるとしていたのに対して，1881年のマルクスは「外からの衝撃」とは一応別個に，ロシア社会の内発的傾向として，「共同体はロシアの『社会的再生』の拠点」たりうるとしていた点で，両者の考え方には微妙な差異がみられるのである。

さらに両者のロシア観・ロシア像を対比すれば，ほぼ次のように要約しうるであろう。まず，現にロシアの共同体は崩壊の危機にさらされており，かつそのこととの関連において，ロシアは革命の前夜にあるという現実認識においては両者ともに共通であったし，また，ロシア革命を西欧のプロレタリア革命の一環として把え，両革命は相補関係にあるとする点においても両者は共通であり，その点は1882年の「序文」で示されているところである。しかし，そのような共通認識のもとに，エンゲルスの場合は，共同体は一定の段階においては社会発展のための“恩恵”ではなくて，逆にそれは“桎梏”となると考えていたのであり，それ故に彼は，ロシアの「共同体の崩壊→分割地土地所有→資本主義の発展」を，西欧の先進諸国と共通の歴史発展の必然の道と見，かつそれを歴史の進歩として是認する立場に立っていたのである。それ故に彼は，仮りにロシアに非資本主義的発展がありうるとすれば，その契機はただ一つ，「外からの衝撃」以外にはありえないとしていたのである。それに対してマルクスは，ロシアに西欧の先進諸国とは異なる特殊な非資本主義的発展の道を想定し，共同体がロシアの「社会的再生」の拠点たりうるとしていたのである。彼は，後進国ロシアは，「近代の歴史的環境の中に存在し，より高次な文化と同時的に存在しており，資本主義的生産の支配している世界市場に結びつけられている」が故に，「外から」移植された「上部構造としての資本主義」が農村共同体と相対峙しており，現に共同体は国家・資本家・地主等による重圧収奪にさらされて危殆にひんしてはいるが，しかし，この共同体はロシアの「社会的再生の拠点」たりうるのだという。彼は，危殆にひんしている共同体を救うことは極めて困難で，かつ絶望的なことであることを重々認識してはいたが，しかし，ロシアにとっては，共同体の崩壊と資本主義の発展というのが唯一の不可避な道なのではなく，共同体はロシアの「社会的再生の拠点」たりうるのであるから，それを救うための「一つのロシア革命が必要である」と訴えるのである。

このように両者のロシア像には微妙かつ重大な差異があったのであり，筆者はこのようなマルクスのロシア像を複合的発展像，エンゲルスのロシア像を単一的発展像と規定したのである。

2. ワリツキー，シュヴァルツ，マンデルバオムの見解をめぐって

「1」で述べたごとく，筆者は，マルクスとエンゲルスのロシア像にみられる差異を重視するものであるが，筆者とほぼ同様の見解を示しているのは，ワリツキーである。彼は，その点について次のごとく述べている。

「(ザスーリッチあての手紙の草稿に示されている)マルクスの見解とは異なって，エンゲルスは，ロシアの農民共同体の崩壊を一つの“自然的”不可避的過程(a ‘natural’ and inevitable process)と解釈する傾向があったし，かつまた彼は，社会主義革命がまずもって西欧で勝利せねばならぬと

いうことを力説することをやめなかった。彼はかって一度も農民共同体が西欧に対してのロシアの“優越性”の要素であるとする考え方を強調したことがなかったばかりか，その反対に，彼のある発言では，農民共同体はロシアの社会的再生の拠点であるよりも，むしろロシア専制の伝統的な足場であることを示すものだと述べていたのである。」(A. Walicki : *The Controversy over Capitalism*, 1969. pp. 192—3)

「われわれは，マルクスのこれらの草稿中に，法則的・“自然的”過程の観念をもって社会的変化を解釈する19世紀的方法を掘り崩す多くの深い洞察を発見する。また，われわれは，それらの中に，“非同時”発展，独特な“後進性のもつ特権”，重畳的集約発展におよぼす，文化的接触とデモンストレーション効果の役割等の一連の新しい諸問題，一言でいえば，経済的・社会的後進性を克服するための非資本主義的発展の道の問題についての興味ぶかい定式化を発見するのである。」(A. Walicki : op. cit., p. 194)

みられるように，ワリツキーもまたマルクスとエンゲルスにみられるロシア像の差異を明確に認識しているのである。このワリツキーの場合とは異なって，シュヴァルツはマルクスとエンゲルスの差異を主としてロシア革命と西欧のプロレタリア革命との時間的な前後関係・波及関係についての両者の考え方の差異に求めるのであって，両者のロシア像にみられる差異を指摘する観点が稀薄なことが彼の見解の特徴である。シュヴァルツは，エンゲルス説については，エンゲルスがロシアの非資本主義的発展の不可欠の前提条件を，もっぱら西欧のプロレタリア革命の勝利に求めていた側面を重視し，その点にエンゲルス説の核心を求めるのであり，したがって，エンゲルス説の他の側面である，もしも「外からの衝撃」がないならば共同体の崩壊は必至であると考え，かつそれを歴史的必然であるとしていた側面をいわば欠落した形で問題にしている。こうした観点からして，シュヴァルツは，1882年の「序文」に関しては，ロシア革命が西欧のプロレタリア革命の「合図」となるという考え方は，本来，エンゲルスにはなかったというのである。それに対して，マルクスの場合には，「外からの衝撃」とは一応別個に共同体がロシアの「社会的再生」の拠点たりうること，それ故に共同体を救うために「一つのロシア革命が必要」であると訴えている点をおさえて，マルクスにはロシア革命が「合図」になるという考え方があったとするのである。こうしてシュヴァルツは，「序文」におけるエンゲルスの妥協説を主張するのである。このように，シュヴァルツの見解の力点は，ロシア革命と西欧のプロレタリア革命の時間的流れの中における前後関係・波及関係についてのマルクスとエンゲルスの考え方の差異の点におかれているのである[4]。(S. M. Schwarz; *Populism and Early Russian Marxism on Ways of Economic Development of Russia*, 1955, pp. 47-54. 拙著，第8，第9章，参照)

ワリツキー，シュヴァルツのそれぞれの見解とも異なる，第三の立場ともいうべき見解を述べているのは，マンデルバオムである。彼の論文は，

---

4) シュヴァルツとワリツキーの両者の見解を対比するとき，筆者自身の見解はワリツキーと共通の立場に立つものではあるが，しかし拙著での筆者の論理展開，とくに「序文」におけるエンゲルスのマルクスに対する一方的妥協説を主張した箇所では，シュヴァルツ説に影響され，それに依拠して議論している点で大きな欠陥のあったことを反省しておきたい。このようにシュヴァルツに引きずられて議論したことについては，筆者が彼の論文を読んだのはまだ構想をねっていた作業段階のこともあって，彼の論文からは強烈な印象を受け，それに一方的に影響されたことによるのである。その点では，すでに筆者自身の構想をまとめ上げてしまった以後に読んだことから，それ程，強い印象を受けず，したがって，たんにその見解を補足的に参照するにとどまったワリツキーの著書に対する場合とは異なるのである。このように筆者はシュヴァルツに引きずられて論理展開をしたのではあったが，しかし，拙著では，その上に立って，彼と筆者との相違点を問題にし，彼にはマルクスとエンゲルスのロシア像にみられる差異についての認識の稀薄である点を指摘し，筆者独自の見解として，マルクスのロシア像＝複合的発展像，エンゲルスのロシア像＝単一的発展像と規定して，両者のロシア像の差異について積極的に展開したのであり，かつこの観点から筆者と田中・水田両氏との差異についても言及しておいたのである。なお，ワリツキーの著書については，こんどまた読み返してみて，筆者の見解との意外に強い類似性をあらためて認識させられたことをつけ加えておきたい。

一つの理論的立場を首尾一貫して頑固に貫いている骨格のたくましいものである。マンデルバオムは，1875年の「ロシアの社会関係」，1894年の「『ロシアの社会関係』へのあとがき」のエンゲルスのロシア観と，1881年のザスーリッチあての手紙およびその草稿のマルクスのロシア観には，明確な差異のあること，それ故，両者は相容れない理論的立場に立つものであることを主張し，彼自身は，マルクス説に反対して，完全にエンゲルス説を支持している。その際の彼の立論において特徴的なことは，マルクスのロシア論を批判するに当って，エンゲルスのロシア論に依拠するのはもとよりのこととして，なおその上に，ロシア論以前におけるマルクス自身の諸論説を，数多く援用して，いわばロシア論のマルクスをロシア論以前のマルクスをもって批判せしめるという方法をとっていることである。マンデルバオムによれば，後進国ロシアでは，その内発的傾向としては，経済発展段階を飛び越す非資本主義的発展などということはそもそもありえないことなのである。したがって，仮りにロシアが，資本主義的発展段階を経由せずして，共産主義的発展をすることがありうるとすれば，それは唯一つ，西欧のプロレタリア革命が勝利し，ロシアが勝利した社会主義西欧からの援助を受け，またそれを手本とすることができる時においてのみのことであると主張し，その典拠をエンゲルスに求める。また，ロシアが，発展段階を飛び越しうるなどのことは，そもそもありえないという見解については，根底において彼をつき動かしているのは，次のような信念である。すなわち，それは，仮りに後進国ロシアが，先進資本主義諸国から技術的機械的設備としての生産諸力を移植しえたとしても，それらを運転・運営しうるにたる労働者自身の労働能力と素質が伴わぬ限りは，資本主義の正常な発展などありえないという信念なのである。その点を彼は，『資本論』，『剰余価値学説史』，『ドイツ・イデオロギー』などを引用して主張するのである。例えば，彼は，次のように主張する。「生産諸力は，単に“対象的機関”，つまり実際上ただ単純に輸入しうる機械として存在するのみならず，同時にまたそれは，労働者の素質や能力としても存在するのである(『剰余価値学説史』III)。工場体系の導入にあたっての主たる困難は，『人間をして労働における不規則な習慣を放棄せしめ，彼らを一大自動装置をもつ不変的規則性に適応せしめること』にあったし，またあるのである(『資本論』I)。」「このような諸能力の習得は，それ自体，物質的生産用具に照応した個々人の能力の発展以外の何物でもない。それ故に，生産用具のある全体性の習慣は，個々人自体における能力のある全体性の発展なのである(『ドイツ・イデオロギー』)。」(K. Mandelbaum : *Einleitung zum Die Briefe von K. Marx und F. Engels an Danielson*, S. XVI) また彼は，『経済学批判』から，「原生的な共同所有の形態は特殊にスラヴ的なもの，または全く排他的にロシア的形態であるとするのは，近年流布されている笑うべき偏見である。それは，われわれがローマ，ゲルマン，ケルトにおいて指摘できるものの原初形態である……」という箇所を引用して，マルクスの1881年における共同体がロシアの「社会的再生」の拠点であるとする見解と対比するのである(K. Mandelbaum, *Ebenda*, S. XIII)。こうして，マンデルバオムのロシア像は，筆者の用語にしたがえば，徹底した単一的発展像なのであって，マルクスが想定していたような，後進国ロシアと西欧の先進資本義諸国との並存関係のもとでのロシアの非資本主義的発展がありうるといった発想は彼には絶無なのであり，そうした発想や分析視角を徹底して排撃することにおいて，頑固な一貫性を示すのである。

このようなマンデルバオムの見解を，ワリツキーのそれと対比すると，両者はそれぞれに，マルクスとエンゲルスのロシア像における差異を明確に前提した上で，マンデルバオムはエンゲルス説を，ワリツキーはマルクス説を支持するのであり，その点で両者の見解は対極的位置を占めるものである。この両者に対して，シュヴァルツの見解は，マルクスとエンゲルスのロシア論における差異を主としてロシア革命と西欧のプロレタリア革命の時間的前後関係のもとでの波及・相補関係についての差異に求めている点で，マンデルバオム，ワ

リツキーとは異なる位置を占めるものである。ただし，この三者に共通している点は，マルクスとエンゲルスのロシア論・ロシア観には一定の差異のあることを明確に認識していることであり，その上でそれぞれの見解を打出しているのである。

3. 平田・竹内論争に関連して

(1) 第一・第二書簡の評価

平田・竹内両氏の間でかわされているマルクスのロシア観に関する論争は，主として彼の1877年の『祖国雑記』編集部あての手紙(以下，第一書簡とよぶ)と，1881年のザスーリッチあての手紙(以下，第二書簡とよぶ)およびその草稿をめぐってなされている。マルクスは，この第一・第二書簡をつうじて，ロシア社会の発展についての「二つの道」，すなわち資本主義的発展と非資本主義的発展の「二つの道」をめぐってなされていたロシアでの論争に関連して彼の見解を提示している。この両書簡に示されているマルクスの見解について，竹内氏は，「われわれにとって『資本論』とは何か(下)」(『思想』1970年6月号)において，次のように評価して，平田氏を批判している。

「マルクスは(次に見るエンゲルスとはまるで違って)ナロードニキに対して深い共感を持っていたこと，さらに第二書簡では，たんに共感というにとどまらず，理論的可能性としてもナロードニキの主張を肯定していたこと，これはまったく疑いえない事実である。けれどもマルクスは同時に経験的観察にもとづく歴史的予測としては，遺憾ながらナロードニキの主張のようには事は運ばぬであろう(第一書簡)，あるいはひじょうに困難であろう(第二書簡)との覚めた意識もあったのであり，この面を一切捨象して，〔平田氏のように——淡路〕ナロードニキを積極的に支持したとの一方的断定を下すことは，やはり誤りだと言わねばなるまい。」(53頁)

このような竹内氏の主張を，平田氏は「歴史的必然と歴史的選択(最終回)」(『展望』1971年12月号)において，真向から否定している。

まず，第一書簡の解釈について。

第一書簡において，マルクスは「もしもロシアが1861年以来歩んできた道を今後も歩み続けるならば，ロシアは，歴史がこれまでに一国民に提供した最良の機会を失ってしまい，資本主義制度の宿命の有為転変のすべてにさらされることになるであろう。」という「結論」を述べているが，平田氏はこの「結論」について，「『歴史がこれまでに一国民に提供した最良の機会』を，ロシアが，今失ってはならない，それを失うかどうかは，現在のロシア国民の決断にかかっている，ということである」(同誌，184頁，傍点，平田氏)と解釈する。このような解釈をもって，氏は，竹内氏が主張するように，第一書簡においてマルクスが「遺憾ながらナロードニキの主張のようには事は運ばぬであろう」と判断していたのだという竹内説を批判するのである。この「結論」についての筆者の解釈としては，すでに拙著でも述べておいたごとく，この「結論」そのものは抽象的一般的な見通しを述べているにすぎないのであり，この「結論」からは，竹内氏のように，「遺憾ながらナロードニキの主張のようには事は運ばぬだろう」とマルクスが判断していたとも，逆にまた，平田氏が断定されるように，「『歴史がこれまで一国民に提供した最良の機会』をロシアが，今失ってはならない，それを失うかどうかは，現在のロシア国民の決断にかかっている」とマルクスがロシア国民に対してご宣託をたれていたとも言えないのである。そうではなく，マルクスは，いわば「中立」の立場をとっているのである。それ故にこそ，この「結論」の評価をめぐって，ナロードニキ，プレハーノフ，レーニンの間で三者三様の解釈がなされたのである。その点について，ワリツキーによる次のような指摘を引用しておこう。

「ナロードニキ派は，これらの主張を，ロシアが資本主義的発展を回避しうる機会が存在するという彼らの信念に合致するものであると解釈したのは至極当然である。ナロードニキの著名な著作家である，グレーブ・ウスペンスキーは，マルクスのこの手紙に，ロシア社会がその“最良の機会”を生かす能力のないことに対して向けられた“厳しい非難”を読みとった。レーニンは，ナロードニキとの論争において，マルクスが事実上は一定

の明確な回答を与えることを避けたのだと主張した。プレハーノフは，マルクスの手紙に対する彼の解釈の基礎を1877年以降のロシアが資本主義の道を歩みつづけてきたという事実に求め，したがって今や(マルクスの定式化に従って)，ロシアは資本主義発展のすべての有為転変をこうむらねばならない，としたのである。」(C. Walicki, *op. cit.*, p. 187)

このような三者三様の解釈がなされえたということからしても，この書簡の例の「結論」だけからは，マルクスが何れかの側を明確に支持していたとは断定しえないのである。ただし，単にこの「結論」のみについてではなく，書簡全体をとおしてみるとき，マルクスが全くの「中立」の立場に終始していたとはいえない。「ロシアが1861年以後に歩んだ道を今後も歩み続けるならば，……」という一応の結論を述べた後，書簡後半部において彼は，「いちじるしく類似した出来事でも，異なる歴史的環境の中で起こるならば，まったく異なる結果をみちびき出すものである」と述べ，現実の歴史的発展は，「普遍的歴史哲学的理論という万能の合鍵」によっては解きえないと主張しているのである。こうしてマルクスは，一応は「中立」の立場をとりながらも，彼の力点を，異なる歴史的環境を重視する側，すなわち，ロシアに西欧の先進諸国とは異なる非資本主義的発展の道を想定する側においていたのである。その点では，この第一書簡全体の解釈として，マルクスが「遺憾ながらナロードニキの主張のようには事は運ばぬであろう」と判断していたとする竹内説には反対である。(詳しくは拙著264頁を参照されたい。)

第二書簡の評価について。

1877年の第一書簡と1881年の第二書簡とを比較して，竹内氏は，マルクスが前者では，「遺憾ながらナロードニキの主張のようには事は運ばぬであろう」と否定的であったのが，後者では，「非常に困難であろう」が，かならずしも事は運びえないことではないと肯定的になったのであり，したがって，1871年から1881年に至る間に，マルクスが「180度の思想的転換」(『思想』1970年6月号，48頁)をとげたと解釈されているが，この点については平田氏同様に筆者もまた氏の主張には同意しえない。拙著でも述べておいたように，1877年から1881年に至るマルクスの考え方の推移は，逆転ではなくて，同一の線上における前進なのであり，彼は，共同体をテコにすることによる，ロシアの非資本主義的発展の可能性とその必要性によせる認識をよりいっそう強めていったのである。その点では，竹内氏を批判して，平田氏が，「第二書簡が積極的に述べていることは，……『共同体に襲いかかっている有害な諸勢力』すなわちツァーリズム＝資本主義的上部構造の革命的廃棄であり，これを通じての共同体発展の諸条件の保障なのである」(『展望』1971年12月号，184頁)，と主張されているとおりである。ただし，平田氏がこの主張をさらに拡張して，氏が「草稿」について次のごとく解釈される点には問題がある。「草稿」においてマルクスが，危殆にひんしている共同体の将来について，「私的所有の要素が集合的要素にうち勝つか，それとも後者が前者にうち勝つか。すべては，それが置かれている歴史的環境に依存するのである」と述べた後で，結局のところ，「ロシアの共同体を救うには一つのロシア革命が必要である」と彼が訴えている点について，平田氏は，共同体にとって，「『二者択一』の可能性が開かれていたのである。この歴史的選択をロシアは，いまなお，許されている。逆にいえば，西ヨーロッパで進められてきた歴史的過程が，ロシアにとって歴史的宿命であるのではない。これを歴史的宿命と看做すのは，ブルジョアイデオロギーに他ならない。このまさにブルジョア的なイデオロギーが，ロシアの革命運動を毒している。こともあろうに『マルクス主義』の名において。」(『展望』1971年11月号，180頁，傍点，平田氏)，と断定するのである。この平田氏の断定については，氏とは異なってマルクスその人は，氏のように，共同体の崩壊を「歴史的宿命と看做すのは，ブルジョアイデオロギーに他ならない。このまさにブルジョア的なイデオロギーがロシアの革命運動を毒している。こともあろうに『マルクス主義』の名において」といった，全く

影のない一本調子で「歴史的選択」についてうたい上げていたのではない，と筆者はいいたい。「草稿」における，共同体の将来についての，マルクスの分析・認識・見通しに関する叙述は実に屈折の多いものであり，「二者択一」について，果してマルクスが，ロシア革命による共同体の救出の方により多くの可能性をみていたのか，それとも逆に遺憾ながら共同体の崩壊は必至なのであり，したがってその救出はもはや絶望的であると考えていたのかについては，何んとも判断のつき難い微妙な点である。そうした点に関連して，拙著において筆者は，マルクス自身が「二者択一」のうち，共同体の発展の方向が理論に適うものであると主張し，逆に共同体の崩壊の方向はそうではないと主張している論理展開について，「彼の願望が彼の理性または論理を圧倒している箇所である」と述べておいたのである。こうしてみると，マルクスの場合は，けっして平田氏の解釈されるごとく，全く影のない一本調子の判断にもとづいて，おおらかに「一つのロシア革命」が必要であると主張していたのではなく，いわば現実の推移としては共同体の崩壊は必至であり，それを救うことは絶望的ではあるが，なおかつそれを救うために「一つのロシア革命」が必要である，という屈折した判断をしていたのであると考えられる。

なお，ここで一言つけ加えておけば，もしも平田氏の言うごとく，共同体の崩壊を「歴史的宿命と看做すのは，ブルジョアイデオロギーに他ならない」というのであれば，ほぼ一貫して共同体の崩壊の必然性を強調し，そこに西欧の文明諸国と共通の歴史発展の道をみていたエンゲルスの見解を平田氏はいかに位置づけられるのであろうか。

(2)『資本論』の本源的蓄積過程の論理の適用範囲

第二書簡においてマルクスは，フランス語版の叙述を引用した上で，『資本論』の本源的蓄積過程の論理の適用範囲を明確に西欧の文明諸国に限定していることは周知のところであるが，その点の解釈をめぐって平田・竹内両氏は論争している。平田氏は，「『資本論』第一巻の理論的核心としての所有権転回の論理が，その直接の適用範囲を〈西ヨーロッパ〉に〈限定〉されている，とマルクスは主張しているのであって，竹内氏の言うように，〈ロシア資本主義化論争〉に対する，時論的レベルでの〈中立を宣言していた〉のではない」(『展望』1971年12月号，181頁)と，竹内氏を批判している。これに対して竹内氏は，「『資本論』の本源的蓄積の章を西欧に限定したことは，マルクスの言明どおりでいささかの疑いの余地もない。しかし，『資本論』の総体がロシアには直接あてはまらぬとはどういう意味なのか。……ロシアその他の非西欧地帯を除外せねば成立せぬ〈史的唯物論〉とはどんな唯物論なのか」(『展望』1972年2月号)，と問い返えしている。

この両氏のやりとりを対比すると，竹内氏の反論は，平田氏が限定して主張している範囲を越えた点を問題にしていて，論点がかみ合っていない。したがって平田氏としては，竹内氏に対して，「直接の適用範囲を〈西ヨーロッパ〉に〈限定〉している」(傍点，淡路)と言ったまでのことであって，氏の主張はそれ以上のことでも，またそれ以下のことでもないと言うことなのかも知れない。しかし，筆者が，ここであえて問題にしたいのは次の点である。それは，『資本論』の所有権転回の論理の適用範囲は西欧に限定されていたということを前提し，そのことを十分にふまえた上で，平田氏自身が，『資本論』のこの論理とマルクスのロシア論の論理の両者の関係・位置づけをどのように考えているのかという点である。その意味で，筆者もまた竹内氏と同様の反論を氏に呈したいのである。周知のごとく氏は，『市民社会と社会主義』において，あれだけ「市民社会論」をうたい上げ，「市民社会」こそが人類史の発展を切り拓いていく原動力であることを力説してきたのであるから，その「市民社会論」と晩年のマルクスのロシア論についての氏の見解とはいったいいかなる関係にあるのか，はたして両者は両立しうるものなのかどうか，についての氏の積極的見解をききたいのである。この点については，たんに氏が『資本論』の所有権転回の論理は「直接の適用範囲を〈西ヨーロッパ〉に〈限定〉されている」

という主張をくり返すことではすまされないはずである。直接には適用されないということは，間接には適用されるということを意味するのか。それとも，それは間接にも適用されないということなのか。おそらくそうではあるまい。

マルクス自身は，第二書簡の「草稿」において，現に共同体は崩壊の危殆にひんしていること，したがって「共同体の崩壊→資本主義の発展」の道の可能性のあることをもまた認識していたのであり，その点ではロシアに西欧の文明諸国との共通の歴史発展の方向をも一定の範囲内においてではあれ予測していたのである。しかしながら彼は，このような認識・予測と共に，その反面において，それ以上に強く，共同体がロシアの社会的再生の拠点であること，それ故に共同体を崩壊の危機から救うための，「一つのロシア革命の必要」を訴えているのである。この後者の点において彼は，西欧の文明諸国の場合とは異なる特殊な発展の道をロシアに想定していたのである。しかも彼が，このような想定をなすに至ったのは，西欧の先進資本主義諸国との同時並存関係にある後進国ロシアの発展の特殊性としての複合的関係を重視し，分析した結果としてであった。その点では，「共同体の崩壊→分割地的土地所有→資本主義の発展」をロシア発展の唯一の道と考え，かつそのことの西欧の先進諸国の発展との共通性を一面的に強調するエンゲルスとは異なっていたのである。したがって，「草稿」のマルクスは，いわば，『資本論』の論理である人類史共通の発展の道とロシアの特殊な発展の道との両者を結ぶ統一的論理の探求のために行きつ戻りつの苦闘をしているのである。このような「草稿」のマルクスをふまえて言えば，平田氏が，第二書簡の範囲内にふみとどまったままで，いわば氏自身の「市民社会論」を置いてきぼりにした形で，竹内批判に終始しているのは納得のいかないことである。いったい氏は，氏の「市民社会論」との関連において，ロシア社会の類型認識と世界史的段階認識の関係をどのように把握されているのであろうか。

(3) マルクス，エンゲルス，レーニンのロシア観の位置づけ

最後に，エンゲルス，レーニンのロシア観についての平田・竹内両氏の見解にふれておこう。

平田氏は，論文「社会主義における人間の再生」において，第二書簡のマルクスと『ロシアにおける資本主義の発展』のレーニンとの両者のロシア認識には“決定的対立”があると主張されており，その点，筆者も同感であるが，それでは，このようなマルクス，レーニンとの対比において，氏はエンゲルスのロシア観をいかに位置づけられるのであろうか。

平田氏は，マルクスとレーニンのロシア観にみられる“決定的対立”を強調される反面，マルクスとナロードニキの類似性を力説されるのであるが，それに対して竹内氏は，「マルクスはロシアの農民革命をつねに西欧の発達した資本主義諸国のプロレタリア革命との相補関係において把えており，そのような条件においてのみはじめてそれが共産主義への一歩となり得ると判定したこと。このようなインターナショナルな視点がナロードニキによってではなく，まさにレーニン(すくなくとも後年の)によって継承発展させられた」(『展望』1972年2月号)，という。かつまた竹内氏は，共通してインターナショナルな視点の貫かれていたマルクス，エンゲルス，レーニンの三者それぞれの歴史発展像にみられる差異について次のように述べている。すなわち，氏は前掲の『思想』論文において，マルクスの歴史像とは異なって，エンゲルスのそれは「単線的生産力理論的」であることを指摘した上で，「90年代のエンゲルスのロシア観は，7—80年代のマルクスのロシア観とは明確に異なっており，むしろ，そのご数年にして書かれることになったレーニンの『ロシアにおける資本主義の発展』にそのまま直結してゆく底のものであって，したがってもしも平田氏がロシア観におけるマルクスとレーニンとの『決定的対立』を言いたかったのならば，そのまえに，ロシア観におけるマルクスとエンゲルスの『決定的対立』を言うべきであったのではなかろうか。」(同論文，56頁)と，三者のロシア観の位置づけをお

こなって平田氏を批判している。この竹内氏の主張に筆者は同意するものである。

筆者の見解によれば，1875年の「ロシアの社会関係」や，1894年の「『ロシアの社会関係』へのあとがき」におけるエンゲルスのロシア像は，「外からの衝撃」としての西欧のプロレタリア革命の勝利という点を捨象していえば，ロシア社会発展の方向として，「共同体の崩壊→分割地土地所有の発展→資本主義の発展」を予測しているのであり，かつこのロシアの発展の道を，彼は，イギリス，フランス，ドイツ，アメリカのそれと軌を一にする共通の歴史発展の道として把えているのである(1892年9月22日付，ダニエリソンあての手紙)。その意味で彼は，マルクスとは異なって，『資本論』の本源的蓄積過程の論理の適用範囲を西欧の文明諸国に限定していたのではない。このような彼のロシア社会発展像を筆者は，マルクスの複合的発展像とは異なって，単一的発展像と規定したのであるが，まさに，このようなエンゲルスの単一的発展像と共通な発想と視角をもって，ロシアの資本主義発展を考えていたのが，「市場問題」から『発展』をつうじての初期レーニンであった。そうだとすれば，ロシア認識におけるマルクスとレーニンの“決定的対立”を強調される平田氏が，マルクスとエンゲルスの差異について明確な意志表示をされていないことが奇異な感じを与えるのである。いったい氏は，エンゲルスのロシア観をマルクス，レーニンとの対比においてどう位置づけられているのであろうか。マルクスとエンゲルスのロシア観における差異については，筆者のみならず，すでにマンデルバオム，シュヴァルツ，ワリツキー，田中真晴，山之内靖，水田洋，竹内芳郎氏らの内外の諸論者が，それぞれ異なったニュアンスをもってではあるが着目している今日では，その問題を無視し，それを避けてマルクスのロシア観を論じることは許されないであろう。

次に，竹内氏の見解についてであるが，上述のごとく氏は，マルクス，エンゲルス，レーニンのロシア観における発想や視角の差異からして，いわば「マルクス対エンゲルス＝レーニン」と位置づけられた上で，にもかかわらず，ナロードニキと比較した場合，三者の間の差異の側面よりも，三者が共通して堅持していたインターナショナルな視点を重視することの方が文句なしに重要であることを強調されている[5](『展望』1972年，2月号)。この竹内氏の主張に対して，筆者も共感を寄せるものではあるが，しかし筆者としては，三者のロシア観にみられる差異を区別することは，ナロードニキに対比しての共通面の指摘におとらず，否，むしろそれ以上に重要なことであると考えるのである。というのは，レーニン自身の思想と理論の展開過程，とくに後期レーニンにおける『帝国主義論』や「四月テーゼ」の位置づけや評価をするに当っては，この差異を区別することが重要な尺度と考えられるからである。

(岡山大学法文学部)

「付記」 マンデルバオムの「序説」および『マルクスとエンゲルスの蔵書』のうちの該当箇所のコピーを入手しえたことについて，佐藤金三郎・星野中の両氏に謝意を表したい。

5) なお竹内氏は，ナロードニキとは異ってマルクス，エンゲルス，レーニンの三者には共通して「醒めた意識」が貫かれていたことを強調されているが，この点は別個に論じらるべき重要な論点であるので，本稿では問題にしない。その他にも，氏の見解については，なお一二問題にしたい点——たとえば1885年のザスーリッチあての手紙で示されているエンゲルスの見解が，1882年の「序文」のそれから変化しているか否かの点——もあるが，紙幅の関係で割愛せざるをえない。